

教養教育の苦悩
—アメリカと日本—

吉田 文

早稲田大学

アウトライン

1. Liberal arts とは何か
2. 米が Liberal Education にこだわる理由
3. General Education の方式: Distribution
4. 構造的な問題
5. 問題解決のいくつかの方向
 - 5-1. 一貫性を高める
 - 5-2. 研究へのいざない
 - 5-3. 専門教育との関連の明示化
6. 日本の動向
7. 教育の質保証という課題

1. Liberal Educationとは何か

<理念・内容・教育課程>

- 理念：支配層の育成→市民の育成
- 内容：非職業的学問内容
- 教育課程：専門学問の前段階の幅広い学習

<歴史的変遷>

- 古典古代：自由市民のための教育
- 中世大学：学芸学部における自由七科
- 近代西欧：後期中等教育機関（進学準備教育機関）における幅広い基礎学習
- 米の植民地カレッジにおけるprescribed curriculum
- 米のuniversityにおけるGeneral Education

2. 米がLiberal Educationにこだわる理由

<理念>

- 古典古代の支配層＝全人の育成→民主主義社会の市民の育成（⇔経済的職業人）‘cultivated (educated) men’
- 大学卒業生の学習の共通性を高める

<構造>

- 総合制高校システム：進学準備教育機関がない（西欧は後期中等教育で実施）
- 大学院の発明：専門教育、研究の場の確保（西欧と比較して学士課程の水準が低かった）

<現在>

- 学士課程の科目構成：General Education, Major, Electives
- アクレディテーションでGEを置くことが規定

3. General Educationの方式: Distribution

<考え方>

- General Education vs. major: Distribution vs. Concentration, Breadth vs. Depth
- Liberal Educationの理念：非職業的専門

<方式>

- 人文科学・社会科学・自然科学の科目群から必修単位数を履修
- 各学科の科目のシーケンスから初級科目がGEとして提供：GEのみを教える教員はいない。
- GEとしてもMajorとしても履修可：GE用に開設される科目はない。
- 90%の大学がこの方式を採用

4. 構造的な問題

<問題>

- 多数の多様な科目がGEとして提供
- GEの核は何か（科目提供の問題）
- GEで何を学習するか（学生の履修の問題）
- 幅広さ(breadth)と一貫性(coherence)の両立ができない

<問題発生理由>

- 科目提供は学科の自由意思、学生の早期リクルート機能
- GEを統括する責任の不在

<学生の評判>

- ‘さっさと片付けてしまいたい’
- ‘悲惨な領域’

eg. カリフォルニア大学
バークレイ校文理学部

- Seven Breadth Requirement : 7領域から1科目履修が要件
- 文理にわたる履修の確保
- 領域にまたがる科目の存在
- 部分的にMajorの先行履修要件
- 膨大な選択肢

領域	必修科目	科目提供学科	開講科目数
1. 芸術・文学	1	65	798
2. 生物化学	1	20	196
3. 歴史科学	1	61	462
4. 国際研究	1	31	367
5. 哲学・価値	1	39	287
6. 物理化学	1	27	302
7. 社会・行動科学	1	92	1118

5. 問題解決のいくつかの方向

5-1. 一貫性を高める

ポートランド州立大学における‘University Studies’

<科目提供の方法>

- 「1年次探求」：テーマ別の5単位科目を3科目（通年）履修。eg. 「民主主義：理念の歴史」、「地球というシステム」
- 「2年次探求」：GEのクラスターの4単位科目を3科目履修。
- 「上級年次クラスター」：GEのクラスターの4単位科目から1科目履修。2年次のクラスターの1つから選択。
- 「4年次キャップ・ストーン」：異専攻の学生チームによるPBL

<特徴>

- 総合科目、クラスター、楔形、少人数クラス（35~40人）
- Writing across the curriculumによるGE単位の削減（63→45単位）

(続き)

<実施体制>

- Office of University Studiesという恒常的組織（職員）
- 担当専任教員の雇用
- 学科所属教員のローテーション（2~3年）による担当
- テーマ別科目開設（by異学科所属教員とのTT）のための grant
- 学科の教育義務の部分的免除

<問題>

- 学問分野の知識 or 能力という問題
- コスト問題
- 科目開設に付随する教員負担

5-2. 研究へのいざない

<大教室の講義からの解放>

- 少人数
- 参加型
- 研究手法の学習、問題解決学習（仮説の構築、データ収集・分析・解釈という手順の習得）
- Undergraduate Research、サービス・ラーニング、キャップ・ストーンなど

eg. 1978～：Council on Undergraduate Research、約600機関が参加

- 大学以外の機関の参加
- 研究に参加する学生の基礎知識の問題
- 実施コストの問題

5-3. 専門教育との関連の明示化

ノーフォーク州立大学（バージニア州）の事例
（大規模州立大学、成人学生、トランスファー学生が多い）

<GEの理念の専門教育での実現>

- GEにおいては、37単位を必修（英作文、人文・社会・自然）。そこで要請すべき能力の要素を抽出
- MajorにおいてGEの成果を位置づける：カリキュラム・マップ
- Majorとして、GEのコア・コンピテンシーの習得を検討

(続き)

GEの要素 Major科目	文章表現 (形式、構成、内容、言語使用の側面から 評価される文章を記述する)			ITリテラ シー
	GEとしての 成果の表明	GEのコンピテ ンシーのレベル	GEのコンピテンシーの習 得のフィードバックの有無	
学際研究入門	X (明示的)	I (入門)	F (フィードバックあり)	
言語と社会	X	E (強調)	F	
現代のグローバル 化問題	M (非明示 的)	R (強化)	F	
3年次のゼミ	M	A (上級)	F	

- GEとして求められるコンピテンシー領域は、1.文章表現、2.ITリテラシー、3.科学的な思考、4.数量的な理解、5.批判的思考、6.口頭によるコミュニケーション
- すべての専門科目が、GEのコンピテンシーの涵養を意図していない
- 専門の知識と、転移可能な能力とを、同時に涵養できるか
- 専門科目において継続的に、GEのコンピテンシーを涵養できるか

6. 日本の動向

- 学士課程教育の質保証：学士の学位は何を証明するのか
- 中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて』：学士力；学士としての共通性を重視、「学士（〇〇）」
 - ・ 4領域13項目：知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力
- 学術会議（2010）『大学教育の分野別質保証の在り方について』：専門分野別参照基準；専門分野の習得を重視、「学士（〇〇）」
 - ・ 学問分野の特性を踏まえ、世界の認識の仕方・関与の仕方を身に付ける
 - ・ 基本的な知識と理解、分野に固有の能力、ジェネリック・スキル（〇〇を説明できる、〇〇を行うことができる）

7. 教育の質保証という課題

- 日米共通の課題：教養教育をどうするか

<近年の傾向>

- 教育の「質」が問われる：評価
 - 学士課程全体を視野においたGEカリキュラム
 - 提供する教育⇒学生の学習成果
 - 知識⇒能力
-
- 学士力も参照基準も‘指針’
 - 日本の大学は、これらをどのように受け止め、どのように質保証をしていくか...